

宮沢賢治作品の「王様」について  
－「双子の星」を中心に－

About the “King” of Kenji Miyazawa’s work :  
A focusing on “Twin Stars”

山口 豊

YAMAGUCHI Yutaka

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第3号 2018年

宮沢賢治作品の「王様」について  
—「双子の星」を中心に—

About the “King” of Kenji Miyazawa’s work :  
A focusing on “Twin Stars”

山口 豊\*

YAMAGUCHI, Yutaka\*

要旨

宮沢賢治の初期童話作品である「双子の星」にはこの世のすべてを見通した「王様」の存在が描かれている。しかし、作中には姿を現さず、その存在が敬意をもって語られている。宮沢賢治の童話にはいくつか「王様」が登場するものがあり、それらの多くは実体を伴う「王」として取り上げられているのだが、実体を伴わない「王」もいくつかの作品に登場する。そうした王には賢治の中にある宗教への思いを感じとることができる。賢治は童話を書きつつもより深く宗教への思いを強くし、詩や童話にその影響がうかがえるものがある。初期作品とは言え、賢治の童話を貫くものはすでに賢治の中にあったと見るべきである。法華経をはじめいろいろな宗教を経験した賢治にとって、宇宙の中心となる存在を「王様」とするのは当然のことであり、本稿ではそれが「釈迦如来」であったという結論に達した。

キーワード：宮沢賢治 「双子の星」 王様 釈迦如来

はじめに

宮沢賢治の作品は小学校国語の教科書教材として多くの教科書会社に取り上げている。例をあげれば、「やまなし」は光村図書の6年及び学校図書の5年に、「注文の多い料理店」は東京書籍と学校図書の5年に、「雪わたり」が三省堂の6年及び教育図書の5年に、「風の又三郎」が教育出版の5年の教科書にそれぞれ採録されている。いずれの作品も賢治ワールドを代表する童話である。

このほかにも宮沢賢治は多くの童話を残しているが、初期の頃の作品として、生前弟たちに読んで聞かせた童話に「蜘蛛となめくちと狸」と「双子の星」があったようである。このことは実弟の宮沢清六氏が「兄、賢治の一生」で大正7年のこととして述べている<sup>(1)</sup>。これが大正7年であったかどうか、また現在の最終稿の本文との異同について、多くの研究者が様々推論を述べているが、いずれにしても賢治にとって初期の作品であったことは疑いようのないことである。ずいぶんと雰囲気の違いがある二作品であるが、童話を書き始めた賢治はそれぞれに教訓めいたメッセージを残している。

「蜘蛛となめくちと狸」は登場する三者の共通点が非道な行いをしたことによる地獄行きのマラソン選手であったという結論を出すという話であり、こうした動物たちの姿を通して「正しく生きることの大切さ」を教訓的に描いた作品である。

「双子の星」は（一）と（二）の二編からなるが、どちらも純粹極まりないチュンセ童子とポウセ童子の二人が大変な目にあうが、その都度目には見えない「王様」に救われることになり、「純粹であることの尊さ」を暗に示した作品となっている。

この「双子の星」には草稿の表紙に「一層の無邪気さとユーモアを有せざれば全然不適」「第一集 尋

\* 教育学科教授

四年以下の分」と書かれており、賢治がユーモアを交えながら低学年の子どもたちに向けて書こうとしていたことが伺える。賢治にとって低学年の子どもたちとは純粹無垢な存在であるとともに正しく生きるためにはどうするべきかを啓蒙すべき対象であったのだろう。

賢治はこのあと多くの童話を残している。その間には人生観を大きく変える妹の死や自身の病気や葛藤があった。西田良子氏は言う。「妹トシの死」という衝撃的な悲しみも、「羅須地人協会の失敗」というきびしい挫折感もまだ体験していない二十一歳の賢治は、何事にも意欲的に挑戦していた<sup>(2)</sup>と。そして、賢治は童話を通して子どもたちに思いを伝えようとしたのである。伝えたい内容に変化はあっても、伝えたいというその思いは終始変わっていない。その意味で境忠一氏の「いわばそれから後の数多い童話の原型であるといえる」<sup>(3)</sup>という指摘は見逃せない。

さて、宮沢賢治の作品にはこの「双子の星」のほかにも絶対的な力（権力、権限を含む）を持った「王」が登場する作品やその「王」からの下賜物や命令が示される作品が多くある。

本稿では賢治作品に登場する「王」がどのような役割をもっているのかを分類するとともに「双子の星」における「王」とはどのようなものとして描かれているかということについて考察することを目的としたものである。

## 作品とその背景について

まずは「双子の星」のあらすじについて簡単に触れておきたい。前述したようにこの作品は（一）と（二）の二編からなる。

（一）天の川の西の岸にある小さなお宮に住むチュンセ童子とポウセ童子は空の星めぐりの歌に合わせて一晩中銀笛を吹くのが仕事である。ある日チュンセ童子はポウセ童子を誘い、西の野原の泉で遊ぼうと出かけたのだが、泉で大鳥と蠍の喧嘩に巻き込まれてしまい、それぞれを介抱してやったところ、蠍に歩けないので送って行ってほしいと依頼される。小さな二人の童子にとって蠍は大きく重く、遅々として前に進まない。六時間以上も蠍を抱えて歩くが先は見えず、日暮れが迫ってきている。もうすぐ童子たちが銀笛を吹かなければならない時間が来るのだが、童子たちは自分は罰せられても蠍を助けようとする。蠍が「どうか許してください。私は馬鹿です。あなた方の髪の毛一本にも及びません。きっと心を改めてこのおわびは致します。きっといたします」と泣いて詫言ったその時、「王様」の命令で稲妻が現れ、「さあご一緒に私のマントへおつかまり下さい。王様はどう云う訳かさつきからひどくお喜びでございます」と述べて、二人を連れて一瞬のうちにお宮に戻る。

（二）ある日二人のところへ彗星がやってきて旅に出ようと誘う。二人はそんなことは王様がお許しにならないはずだと断るが、彗星は王様から許可が出たと嘘をつく。疑うことを知らない純粋な二人はそれならと出かけるが、途中で彗星に海の中に落とされてしまう。海の中ではひとりでに新入りと勘違いされ、さらに鯨にも脅される。困り果てていた二人の前に海蛇が現れ、海蛇の王の前に連れていかれる。海蛇の王は「王様はこの私の唯一の王でございます」と述べて竜巻に二人を乗せて天上へと送り返す。途中、二人は自分たちを騙した彗星がばらばらにされて海に落ちていくのを見る。二人は見えない空の王様に向かって、詫言るとともに自分たちを騙した者にも慈悲を願う。

このように（一）（二）ともに「王様」が登場するが、姿は見えない。

二編で一つの作品となるというのは、「主人公が〈双子〉であるからに違いない」<sup>(4)</sup>と遠藤佑氏は分析している。たしかにこの作品にはいろいろと対になる要素が散りばめられている。（一）は昼の事件であり、（二）は夜の事件であること、（一）は天の泉なので平行移動だが、（二）は天から海底へと

いう垂直移動であること、(一)ではチュンセ童子からの誘いだが、(二)ではポウセ童子からの誘いになっているなど、2つでセットになっている仕掛けがあちこちに施されている。

仕掛けと言えば、この作品には賢治自身が草稿の表紙に記していたようにあちこちに「ユーモア」が散りばめられている。賢治はそのことも気に入って弟たちの前で楽しく読んで聞かせたのではないだろうか。

その賢治のいう「ユーモア」を独特の発想や異なるものとの結び付けと考えていくつか挙げると、次のような点が挙げられよう。

#### ①泉に現れた大鳥

チュンセ童子とポウセ童子が泉で遊んでいると、大鳥がやってきて頭を泉に突っ込んで「三分ばかり咽喉を鳴らして呑」むという場面がある。しかし、ギリシャ神話によると、からす座の鳥は怠惰で嘘つきな性格をしており、嘘でアポロンに妻のコロニスをやらせてしまったため、その罰としてどれだけのどが渴いても、すぐ横にあるコップ座の水に嘴が届かないようにして苦しみ続ける姿を天に晒された星座だという<sup>5)</sup>。そんな鳥が水をたらふく飲んで堪能するのである。賢治は大鳥の満足そうな顔を想像しながら描いたことだろう。

#### ②蠍が頭に傷を受ける

ギリシャ神話では蠍は女神ヘラが放ったもので、大言壮語するオリオンの足を刺したとされている。その蠍が今度は大鳥の頭を刺すのである。もっとも鳥の足には蠍の鉤針も刺さらないであろう。蠍は賢治の他の作品にも登場するが、わがままな性格はこの初期童話においてもすでに形成されていたのである。

#### ③なまことひとで

海に落ちた星がひとでに新参者扱いを受ける。これはひとでと星という形からの類推であることはいうまでもないが、嘘をついた彗星がなまこになるという発想が賢治らしい。なまこは古事記において天宇受賣命に口を裂かれるという場面がある<sup>6)</sup>。口から出た嘘は口に罰を受けるのだという賢治なりの皮肉、風刺が一種のブラックユーモア的なものとして感じ取ることができないだろうか。また、嘘は醜いものであり、諺にも「なまこの化けたよう」というものがある。これは醜いものたとして用いられる。純粋な童子を騙した嘘は醜いものという連想からなまこになるというのも賢治ならではの発想ではないだろうか。

ここでこのようにユーモアのあふれる作品を書いた頃の賢治はどのような境遇であったのかを確認しておくこととする。

この作品の成立は前述したように大正7年とする説のほか、大正8年頃とする説や大正10年頃とする説がある<sup>7)</sup>。そしてそれぞれの根拠に賢治の状況を挙げている。

大正7年の賢治は22歳。3月に盛岡高等農林学校を卒業し、研究生となり、9月まで稗貫郡土性調査に従事した。その間6月末に肋膜炎となり1ヶ月静養を余儀なくされた。12月には日本女子大に入学していた妹のトシが入院し、母と上京し、病院の近くの宿から看病に通っている。翌年1月母がさきに花巻に戻り、賢治が一人でトシの看病をする。このとき上野の図書館にもよく通っている。3月、トシを連れて花巻に戻り、実家の店番をしたり、野菜を作ったりして暮らしたという。大正10年、店番をしていた賢治の背中に日蓮遺文書が落ちたのをきっかけに上野の国柱会に駆け込むことを決めている。8月下旬に妹トシの具合が悪くなり帰郷したが、そのとき持ち帰ったトランクには童話の原稿がぎっしり詰め込まれていたという。

父とは宗教のことや進路のことで対立はしていたが、トシも存命であり、特に人生を大きく変える出来事もなく、矢川澄子氏の言うように「初期童話ではまだイーハトーヴという地方性の中にやすらうていた賢治の幻想の時空間」<sup>⑧</sup>に浸ることができていた時期である。

天沢退二郎氏は「双子の星」の解説として「一際明るく、いかにも《童話的》な甘美さにひたされている」<sup>⑨</sup>と表しているが、賢治の置かれていた環境からすれば当然のことと言えよう。

### 賢治作品に登場する王について

賢治の童話作品の中でひとときユーモラスな雰囲気を持つものに「カイロ団長」がある。「カイロ団長」は高山寺の「鳥獣戯画」を連想させる世界を舞台に描いた作品である。雨蛙たちは人の役に立つことを喜びとして日々働いていたが、殿様蛙の店で舶来ウイスキーを飲んだ代償として強制労働を強いられる。殿様蛙の要求がエスカレートしたとき「王様」からの命令で立場が逆転し救われるというものである。

強制労働という場を描いた他の作品として「オツベルと象」がある。気のいい白象がオツベルにこき使われていたとき仲間の象たちが押し寄せ、苦しんでいた白象を助け出すというものであるが、この2つの作品には救われ方に違いがある。

こうした問題に直面したときの解決方法としては、①協議、②反乱（力による承諾）、③絶対的な権威、力を持つ第三者による救済、という3つの方法が考えられる。「オツベルと象」では②反乱（力による承諾）による救出であったが、「カイロ団長」は「王様」という③絶対的な権威、力を持つ第三者によって苛酷な労働から逃れることができている。

賢治は「猫の事務所」という作品でも獅子を③絶対的な権威、力を持つ第三者として登場させていることから、③絶対的な権威、力を持つ第三者にすくわれることを望んでいたのではないだろうか。

だとすれば賢治は絶対的な権威、力を持つ第三者として「王様」というものを捉えていたのではないか。賢治作品に登場する「王様」を見てみると次のように分類できると考えられる。

#### ① 権威ある身分、実体ある者としての王様

- 「鳥箱先生とフウねずみ」（カマジン国の王様）、
- 「十力の金剛石」（王子のお父さん）、
- 「三人兄弟の医者と北守将軍」（王様）、
- 「学者アラムハマドの見た着物」（ヴェーッサンタラ大王）、
- 「ひのきとひなげし」（初期形）（カニシカ王）、
- 「北守将軍と三人兄弟の医者」（王様）、
- 「旅人のはなし」（王様）、
- 「手紙 一」（王様）、
- 「手紙 二」（アシヨウカ王）、
- 「貝の火」（鳥の王）、
- 「いてふの実」（杏の王様）、
- 「カイロ団長」（王様）、
- 「雁の童子」（王）、
- 「月夜のけだもの」（大王）、
- 「注文の多い料理店」（柏の木大王）

② 神秘的な力を持つ王様

「竜と詩人」(聖竜王),

「双子の星」(見えない王様)

③ 王様という表記ではないが、人智を越えた存在が示されたもの

「銀河鉄道の夜」(神々しい白いきものの人),

「ひかりの素足」(立派な大きな人)

賢治は「王様」をこのようにいくつかの分類をしているようである。「権威ある身分としての王様」は身分こそ違えども触れることのできる王である。賢治はヨーロッパに見られるような貴族としての王を描かず、仏教的な思考をしているからであろうか、「ひのきとひなげし」(初期形)や「手紙 二」に見られるように西域や印度における王を好んで描いている。

もちろん賢治がキリスト教など、他の宗教に関心がなかったわけではない。「銀河鉄道の夜」には北十字、南十字や賛美歌までもが登場するし、「なめとこ山の熊」では熊たちが回々教徒が祈るときのようにひれふしたまま小十郎の死を悼む場面もある。盛岡高等農林学校在学中の賢治は「すでに法華経に異常な感銘を受けているが、一年の夏には願教寺の夏期仏教講習会に出席して島地大等の歎異抄法話を一週間にわたって聴いたり、翌年の六月には報恩寺の尾崎文英について参禅したりしている。また友人を誘って盛岡教会のタピング牧師のバイブル講義を聴きに行ったりもしている。」<sup>(10)</sup> ことからわかる。しかし、そんな賢治だからこそ上記分類の②神秘的な力を持つ王様や③人智を越えた存在が示されたものに対して「王様」と同じく尊敬すべき存在として捉えていたように思えてならない。賢治は「ひかりの素足」で檜夫が出会った「貝殻のやうに白くひかる大きなすあし」をした者は「瓔珞をかけ黄金の円光を冠りかすかに笑って」立つ仏の姿を描いている。しかしやはりここでも顔が見えていないことは注目すべきであると考ええる。

羽鳥徹哉氏は「双子の星 絶対者希求の構造」<sup>(11)</sup> という論文において「姿の見えぬ天なる「王さま」を中心としたヒエラルキーの世界であり、そしてその階層を分かち基本的基準は道徳的性格の高下である」とし、「双子の星」は賢治精神の基本的構造を示していると述べている。

また、別役実氏は「双子の星」の王さまについて、「二人は、「王様」というものが海の中の海蛇の王様のような存在ではなくて、そうであることが期待されるとめどもない方向であることに気付いたのかもしれない。「王様のご存じですよ」の王様は、おおむねそのような現れ方をする。つまりこれは、二人の童子の王様探索のための冒険なのである。」<sup>(12)</sup> と述べており、やはり「双子の星」に登場する王様は実体ある存在ではないとする。

さらに遠藤佑氏の指摘に「双子の星」の王様について「天界の「王様」は、偉大な指導者、すぐれた先達であり、諸王の王として天はもとより、大地と海をも含めた、全宇宙の主宰者であることが明らかとなる。」<sup>(13)</sup> とあり、人智を遙かに凌駕した敬うべき存在であることを示唆している。稲妻を使いに出せる存在、一瞬にして傷を癒やす力のある存在、何もかも遠くからお見通しの存在、龍神の主、嘘をついた彗星をバラバラに裂いて海へ落とすことのできる存在。このような力を持った「王様」が西域や印度の王と同じ存在、同じレベルの者であるはずがない。よいことをすればよい報いが、悪いことをすれば悪い報いがあることをこの童話を読む子どもたちは感じとるに違いないのであり、いさかストレートな教訓ではあるが、それが賢治のねらいでもあったのだろう。

## よだかを星にしたのは

「よだかの星」はせつなく悲しい物語である。鷹に無理難題を押しつけられたよだかは遠くに行ってしまうとお日様や東西南北の星々に懇願するが、相手にもしてもらえない。そんなよだかが全力を振り絞り、落ちているのか、のぼっているのか、さかさになっているのか、上をむいているのかもわからなくなったのち、自分のからだが燐の火のような青い美しい光になって、しずかに燃えているのを見たという話である。

では、太陽や東西南北の星々に断られたよだかを星にしたのはいったい誰なのであろうか。このことについて賢治は何も書いていない。この「よだかの星」が書かれたのは大正 10 年頃と推定されている。この作品には「王様」という形では登場しないが、ここにもやはり太陽や星々を超えた力を持つ慈悲に溢れたものの存在を感じさせるように仕向けられている。

大正 12 年頃の成立とされる「ひかりの素足」にははっきりと「によらいじゆりやうぼん第十六」という語が子どもにも読めるように平仮名で記されている。この「如来寿量品第十六」という経典は賢治が深く信仰した法華経の中でも特に重要な経典とされているという。それは釈迦は今まで人間として生まれてきた後、悟りを開いて仏になったと考えられてきたが、実は久遠不変の釈迦牟尼仏なのであって、他の仏と違い、もともと永遠の仏であって人智を越えた存在であることを示す経典であるとされているからである。

賢治は大正 10 年に上京し、国柱会本部を訪れ、「法華文学の創作」を勧められたが、以前から変わらず持ち続けていた宗教への思いは、初期童話に「釈迦如来」として明記されずとも作品を通して伝えたい隠れた一語であったと考えられるのである。

従って、「双子の星」の「見えない王様」、不思議な力を持つ王様とは、やはり賢治は「釈迦如来」の姿を意識して創作したと言っても過言ではないだろうと思われるのである。

## 注・引用文献

- (1) 宮澤清六『兄のトランク』、筑摩書房、1987、p224
- (2) 西田良子『『双子の星』賢治童話の原点』『国文学 解釈と鑑賞』61 (11)、1996、pp45-48
- (3) 境忠一『評伝・宮沢賢治』、桜楓社、1975、p198
- (4) 遠藤佑「双子の星ーチュンセとボウセの〈旅〉」『宮澤賢治の物語たち』、洋々社、2006、p98
- (5) 藤井旭『星座の神話がわかる本』、誠文堂新光社、2007
- (6) 倉野憲司、武田祐吉校注『古事記 祝詞』、岩波書店、1958、p131
- (7) 佐藤泰正「双子の星」『宮沢賢治必携 特装版』、學燈社、1993、p145
- (8) 矢川澄子「作品解説」『新潮 CD 銀河鉄道の夜』、新潮社、1997
- (9) 天沢退二郎「解説」『宮沢賢治全集 5』、筑摩書房、1986
- (10) 天沢退二郎『新潮日本文学アルバム 宮沢賢治』、新潮社、1984
- (11) 羽鳥徹哉「双子の星 絶対者希求の構造」『国文学』27 (3)、1982、pp60-66
- (12) 別役実「王様へのとめどもない方向」『イーハトーボゆき軽便鉄道』、リプロポート、1990、pp87-92
- (13) 遠藤佑「双子の星ーチュンセとボウセの〈旅〉」『宮澤賢治の物語たち』、洋々社、2006、p117